

服部英二・鶴見和子著

『対話』の文化——言語・宗教・文明』 藤原書店、二〇〇六年

保坂 俊司

本書は、本年七月三十一日に急逝された高名な思想家であり、国際人であった鶴見和子氏（上智大学名誉教授）とモラロジー研究所研究センター研究主幹である服部英二氏（ユネスコ事務局長顧問）との文明に関する広範囲に亘る対話集である。両氏は国際人として日本を外国の視点から語ることの出来る代表的な日本人である。特に、七月三十一日に逝去された鶴見和子氏の「私は自分がいま死ぬことばかり考えている。鬱病じゃないのよ。これは現実の問題として自分がいなくなる。それから後のことを考えると、一人でもそういうこと（私、日本は滅亡の道を歩んでいると思っているの。——一八七ページ評者注）をいう人間がいなくなることを心配して、こんな体で何も役に立たないけれども、いま遺言としていっておきたいことはそれなの」（一八八ページ）という言葉に象徴されるように、本書において鶴見氏は、研究者・国際人・文化人としての長い経験から生み出された智慧と国際社会の中の日本、というより人類文明のなかの日本文明、その意味と将来に対して鋭い洞察、提言を、深い愛情をもって語られている。

恐らく本書は、その意味で鶴見氏の遺言の書ということが出来よう。その意味で、我々読者は、鶴見氏の

危機感を共有し、日本の行く末を真剣に考えねばならない。

さて、本書は鶴見・服部両氏の対談をまとめたものである。そのために会話体である利点が遺憾なく発揮されている。紹介者の読後の感想は、本書において鶴見氏と服部氏の関係は、日本の古代信仰や古神道において行われていた「巫女」と「さ」にわ（審神者）の関係のようである、ということである。因みに、「巫女」とは神の信託を伝えるものであり、象徴的な言葉によって本質を表現し、この信託を理性的な言葉に置き換え、日常言語レベルで証言し、解釈するのが、「さ」にわの役目である。

本書を通じて、両者の息がぴったりと合い、さらに両者の宗教経験ならぬ国際人・教養人としての体験が、渾然一体となってあたかも天空を駆けるように、縦横無尽に話しが展開するにもかかわらず、きちっとしたストーリーが形成されている。まさに文明という途方も無い時間的にも空間的にも広大な対象に、象徴的なテーマや言葉を通じて鋭く切り込み、まさに目から鱗が落ちるような示唆に富む言葉、考え、アドバイスが泉のごとくあふれ出てくるのである。読者は、本書を読み進めてゆくうちに、まさに囁を呑んで神託に聞き入る人々の如く、両者の会話に引き込まれている自分を見出すであろう。それほどに、鶴見・服部両氏の会話は、緊張感にあふれている。

また本書では、一九七〇年代以降、ユネスコの文明交流事業を実質的にリードしてこられた服部氏ならではの裏事情、苦労話というものも極めて魅力的な情報となっている。そして、服部氏が実現された多くの文明間交流プロジェクトが、現在大きく育ち、国際的な文明間交流のプロジェクトに発展しているということは、同慶の至りであるが、その服部氏がこのような東西洋文明の架け橋を築かれた、その背景に服部氏の個人的資質は勿論、それを生み出した日本文化、日本文明という背景があることを服部氏が特に強調されてい

る点は、印象的であった。

紹介者が特に印象的だったのは、本書を通じて展開される日本文明を基礎とした国際人としての知性と教養、その知性と教養からみた日本文明の特質、現在の日本社会の問題点、そして進むべき道など、日本を基礎としながらも、日本を離れ、日本を再評価されるその視点、姿勢に真の国際レベルの教養人の姿や見識を感じた。

まさに、智慧の宝箱を発見したような興奮と知的な刺激に満ちた一書である。

最後に、鶴見和子氏のご冥福を祈念申し上げて、拙い紹介文の最後としたい。